

集会「イラク戦争・憲法九条と私たち ——ベトナム終戦から30年のいま——」

2005年4月10日 於 東京・世田谷・人見記念講堂

講演全記録

鶴見俊輔・澤地久枝
なだいなだ・小田実

【写真はすべて島川雅史さん（本会会員）撮影】

四月一〇日（日）午後、東京・世田谷の昭和女子大学人見記念講堂で、市民の意見30の会・東京と市民意見広告運動の共催、BOMERANG NET（ブーメランネット）協賛の講演集会「イラク戦争・憲法九条と私たち——ベトナム終戦から30年のいま」が五〇〇人の参加者を得て開催されました。講師には、当日、参加されていた作家のなだいなださんにもその場でお願いをし、四人になりました。そのほか、主催・協賛の二団体の井上澄夫さんと重信めいさんから、それぞれが進めている意見広告運動についてのアピールが行なわれましたが、すでにこの運動はどちらも成功裏に終了し、報告が本誌に別掲されていますので、このアピールは省略します。司会は、市民の意見30の会・東京の西田和子さんが務め、開会の辞は、同じく市民の意見30の会・東京の吉川勇一さん、閉会の辞は、協賛団体であるBOMERANG NETの林順子さんがのべました。

開会のことば（要旨）

吉川 勇一

今年（2005年）は原爆六〇年、敗戦六〇年など、いろいろな節目に当たる年ですが、もう一つ、四月三〇日は、ベトナム戦争の終了から満三〇年になり、また、アメリカの北ベトナム爆撃、いわゆる北爆が開始され、それに対して全世界で大規模な反戦運動が展開しだしてからは

満四〇年になります。このベトナム反戦運動から私たちは何を学んだのかを、この運動で中心的に活動された方から話をうかがおうとすれば、どうしても現在、七〇代以上の年配のかたがたということになります。でも、考えてみてください。四〇年前でしたら、私は三四歳、小田さんは三三歳と、若かったのですよ。

問題は、そのときの運動の経験がプラス・マイナスを含めて、検証され、今にどう生かされていくか、ということだと思います。

最近、この運動には参加されていなかったもつと若い世代から、この運動についての立派な研究、総括が次々と登場しています。小熊英二さんの『民主と愛国』に続いて、つい最近、道場親信さんによる『占領と平和』（青土社）が刊行され、そこではベトナム反戦運動が大きくとりあげられ、なくなられた鶴見良行さんの論考にも高い評価が与えられています。ベトナム以後の方が、この運動を迫体験され、しかも貴重な新しい視点を出されていることを、とても嬉しく思います。

しかし、ベトナム戦争からもつとも教訓を学ぶべきアメリカの政府と軍部、そしてそれに全面的に協力した日本政府は、学ぶべきものを何一つ学ばず、戦争の仕方と民意の操縦の仕方だけを学んで、今、イラク戦争を続け、自衛隊の海外派兵を平常化しようと、九条が危うくなっています。

この四〇年間の運動の経験を踏まえ、九条

改変を阻止し、日本を戦争国家にさせないためにどうしたらいいか、これを、今日お話し

いただく講師とともに考えていきたいと思いを。ありがとうございます。(拍手)

ベトナム反戦運動と私

——語っておきたい四つのエピソード——

鶴見 俊輔

ベトナム反戦運動について心に残っていることをお話ししたいと思います。

まず新聞の姿勢についてです。『朝日』、『毎日』、『読売』など共通して言えることは、ノモンハン事件を忘れてしまったことです。

今の記者の中には、それを知らない者さえいます。一九三九年の事件ですが、そのとき日本の新聞はスクラムでも組んでいるかのよう一致して大敗を隠したのです。天才的といってもいいほど隠し通しました。ほかの国では出来ないことです。軍と政府と新聞が力を合わせて隠し通しました。あの時、二万人も戦死したという事実が明らかにされていたら、その後の日米戦争は止められたかも知れません。しかしそれを忘れて七〇年です。新聞は紙名の名前さえ変えていません。

◆スパイを受け入れた責任◆

ベ平連運動について、私にとって忘れてはならぬことがあります。

アメリカ軍からの脱走兵だとしてジョンソン

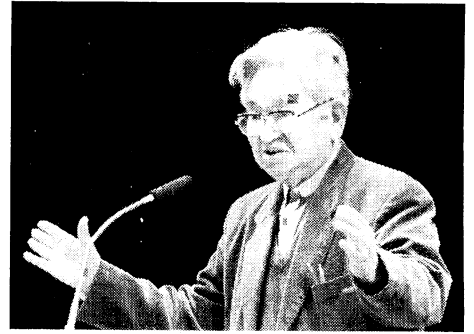
ンという人物が現われたのです。その頃、京都の私の家の近くに「北ホテル」というロマンチックな名前をもった宿屋があつて、その主人は私たちの運動に自由に部屋を使わせてくれていました。

脱走兵が現われると、スクリーニングといつて、私たちの運動の中のメンバーが、本人と会つて、いろいろと事情を尋ねます。そのジョンソンを「北ホテル」でスクリーニングしたのが、私と、京都の精華大学の学長になる、すでに亡くなった深作光貞さんの二人でした。ですが、大体、脱走兵の言うことは支離滅裂といつてもいいようなものです。皆さん、学校では試験というものを何度も受けられたと思いますが、たびたび試験を受けていると、言うことは支離滅裂ではなくなつてゆくものです。ですが、脱走兵は学校になじめなかつたような人が多く、筋の通つたことが言えないのです。ところが、このジョンソンという人物は、自分がなぜ戦争に反対なのかなど、理路整然としっかりした英語で言うん

ですよ。それで私たち二人は、問題なからうと受入れを決めたんです。その後、彼は東京ベ平連のほうに送られ、海外脱出の機会を待つことになりました。

そのうち、東京から連絡が入つて、どうもジョンソンは怪しい、警戒心があまりにも強すぎるし、不審な行動も多い、スパイではないか、というのです。しかし、いったん受入れたものを離すということはなかなか出来ないものです。やがて、海外脱出の計画もままり、もう一人の脱走兵メイヤーズとの二人が北海道に送られます。北海道に入ると、ジョンソンは昼食の席から姿をくらまし、そのあと一行に黒塗りの車の尾行が付きまします。山中の道路で、映画もどきのカーチェイスまであり、ついに釧路市内で包囲され、メイヤーズは警官や米軍MPに引き立てられてゆきまします。姿を消したジョンソンはどこかで生きていたのでしようが、その後会つたことはありません。スパイだったことは明瞭です。

さて、このスパイ、ジョンソンを入れたことについて、私には重大な責任があります。もしこれが、キチンとした組織の中でのことだったなら、私は譴責され、場合によっては追放されますね。私は、イデオロギー的にはマルクス主義者ではなく、親父は自民党の議員で大臣にまでなつたのですし、祖父ともなるともつと困ることになりますから、あんな奴、そもそも怪しい、査問にかける、ということにまでなつたかもしれせん。ですが、ベ平



連という運動体は、組織とも言い難いとてもゆるい集合体で、私はそういう目にはあいませんでした。この脱走兵援助の当

時の最高責任者は、評論家の栗原幸夫さんでしたが、彼は、埴谷雄高氏との対談の中で、一度、誰かをスパイではないかと言い出すと、つぎつぎと誰もスパイではないか、というような相互不信の空気が強くなるというんですね。そうさせないようにチェックする素質が、脱走兵援助運動の中にはあったのです。確かにスパイを受け入れたことで、大きな損害はありました。一番被害を受けたのは、本物の脱走兵メイヤーズです。彼はアメリカに送られ投獄されます。しかしその後も反戦の意思は捨てず、後、日本に来たんです。私たちは再会し、そのことはテレビにも出ました。もう一人の被害者は、当時、大学入試の準備をしていてメイヤーズたちと北海道へ同行した青年です。彼もしばらく警察に留置されました。結局、その青年は大学進学をあきらめます。ですが、それが傷となってつぶれてしまったかという、そうではありませんで

した。今、新聞紙上でも活躍している文筆家になっていきます。文章とてもうまいです。彼の名前を新聞などで見ると、愉快な気持ちにさせられます。先ほど話をされた吉川さんとたまたま一緒に食事をするときに、ふと『朝日新聞』を見たら、かつて「担ぎや」といつて、脱走兵の輸送の仕事に当たっていた十九、二十だった若者たち二人が偶然ですが、同じ日の『朝日』に原稿を頼まれて書いているんですよ。そういうのを見たとき、温かい気持ちになりますね。私の自分の責任で迷惑をかけた人たちが、つぶれないで、見事に生きている、というのは、愉快な気分にもなりますね。そのとき私たちが持った感想は、われわれがやったべ平連というのは、ある意味で学校だったんだな、ということでした。ふつうの学校では学べないことを、この若者たちは、ここで学んだのです。東京だけのことでなく、全国どこでもそうでしたが、そういう若者たちは、今から見ても、とても歩留まりがいいんです。出世と金儲け一方という生き方にならず、今を生きています。

このことは、私自身の失敗に関連することだけに、私はとても嬉しいのです。こういう重大な失敗をやったにも関わらず、私はべ平連に終わりまで残り、四〇年近く経った今、かつての仲間たちと、当時の話を語り合うことが出来ます。こういったことは、大正から昭和にかけてのさまざまな運動の中でも、珍しい事例だと思います。

◆日本人脱走兵のこと◆

二つ目。脱走兵援助との関係では、私にとって最後のケースが特に忘れられません。日本人米兵の脱走です。洋品店の息子だったその青年はアメリカが好きで、親から金を貰って留学したんですね。アメリカという国は、国籍がない国なんです。ドミサイルと言いますけど。アメリカにいて、ある年齢に達すると、アメリカ人でなくても徴兵が来ました。行かなくてもいいのですが、軍隊に入ると、あとで大学の授業料が無料になるなどいろいろな特典が与えられるものですから、彼は行ったんですね。ところがベトナム送りになります。幸い戦死もせず、休暇で日本に来て実家を訪ねたんです。ベトナム従軍を知った両親は驚いて、離脱を勧め、日本には脱走を助けるグループもあるはずだと、べ平連のことを調べ、つれてきたんですね。私は彼にあって、京都の自分の家に泊めました。仮に発覚して、官憲が彼を逮捕に来たとすると、非暴力抵抗の私としては、足にしがみつくぐらいのことはやるつもりでした。それは新聞にも出るだろう。それはアメリカにとっては不利、私にとっては有利、そう判断したからです。

最初のころ、日本の反戦運動に対するアメリカの理解は浅薄で、みな共産党系だらけの認識しかなかったのですが、私となると、共産主義とは無縁、アメリカの大学を出て、そこで専攻したのはプラグマティズム、つま

りアメリカの思想を学んだ者が、それでアメリカに抵抗しているわけで、これはアメリカにとつてはいいことにはならない、そう思ったのです。逮捕に来るのを待ち構えてさえたんです。米大使館は、何度もこの青年は軍に戻るべきだという声明や通告を出しますが、ついに逮捕に来ませんでした。結局、最後には、私は青年を両親の下に帰しました。

このことは、これから起こりうる事態の兆になることではないかと思えます。数ある脱走兵援助のケースの中でも重要なことだと倫理的に言つて、彼は戦争反対という強い意見を持っていたのではない、ただアメリカが好きで、愉快に暮らしたいと思つただけの青年です。最初から強い宗教的、あるいは政治的確信を持っていて戦争を拒否するんじゃないケースですね。彼は途中から戦争は嫌だなと思つて、心変わりしたのです。脱走するくらいなら、最初から徴兵などに応ずるべきではなかったのです。卑怯だというような意見も世論の中にはあったのですが、ペ平連はそんな理解はしませんでした。この点が非常に大事だと思うのです。

その後何年か、彼からは年賀状が届きました。私たちの運動から姿を消しましたが、どこかで生きていることは間違いないでしょう。それでいいと思うんです。だが、この一つの例は、私は、未来につながっていると思いません。日本の近代史の中で、こういう脱走の例、それを援助した例は、ほとんどありません。

こういう事例が、これからの未来につながつてゆくことを希望して、私は生きてゆきます。

◆ペ平連に「内ゲバ」はあったか◆

三つ目の話です。ペ平連に「内ゲバ」があったか、これはなかなか難しい問題です。

さつき開会の辞を述べた吉川さんは、私が人間として信頼している二人のうちの一人です。二人とはずいぶん少ないと思うかもしれませんが、私はあまり人を信用しないことにしているんです。ことに政治家は好きじゃありません。二人のうち、一人は死んでしまっているのです、今は吉川さんだけしか信用していないことになりましたね（笑い）。

死んだもう一人の人の人というのは、『神社新報』の主筆だった葦津珍彦というれっきとした右翼です。長いつきあひがあったのですが、彼が死ぬ少し前、京都で会ったのですが、そのとき、二つのことを言いたいというのです。一つは、自分は、あなた、つまり私の文章を自分の書くものの中に引用したことは一度もなかった、それは、私があなたの名を出せば、あなたに迷惑がかかると思つたからだ、と言っています。立派な人ですね。これだけ信義の厚い人物は左翼の中にはただの一人もいません。一人も。たいてい、自分の都合のいいようにこつちを利用するだけです。もう一つ葦津氏が言ったことは、自分は敗戦後、天皇の弁護人を引き受けた、しかしそれは、天皇に非がないなどと思つているからではない、明

治以来、天皇制がその裏でやってきたまじいことはたくさん知つている、ただ、弁護人は、被告の不利になるようなことは言わない、というだけのことなのだ、それをわかつてほしい、というのです。そしてそれだけ言つて帰りましたが、まもなく亡くなりました。

というわけで、今、信頼している人は、吉川勇一ただ一人だけになってしまいました。大臣になるような奴が偉いんじゃない。だいたい人間で、ダメなんです。この国は、私は滅びると思つています。

ところが、この吉川さんと私とは、ペ平連の中の内ゲバについては意見が違つています。吉川さんは、ペ平連に内ゲバはなかったと言ひ、私はあったと言ひました。この論争は、私と久野収さんの『思想の折り返し点で』（朝日新聞社、90年）と吉川さんの『市民運動の宿題』（思想の科学社、91年）の上などで交わされました。これは、どこの範囲までをペ平連と呼ぶかという見方の違いに関係します。にもかかわらず、吉川さんは私の信頼するただ一人の人です。

◆経済的にも肉体的にも辛かった◆

第四番目の話に行きます。ペ平連が始まったとき、私は四三歳でしたが、九年続いたのは辛かったですね。経済的にもきつかったですし、とくに肉体的にこたえました。

ペ平連にはずいぶん講演会などの依頼が来て、全部を小田さんが回るわけにもゆかない

ので、私も引き受けるんですが、私はたくさ
んな人が集まるのは好きじゃないんです。今日
は満員じゃないですよ。だから元気が出る
んです(笑い)。私の親父は日本でも代表的な
雄弁家で、一万、二万という聴衆を前にする
と、ますます元気が出て演説が高潮するん
です。私はああいう風になりたくないと思
いが強い。親父のやりかたは、そこにいる人
びとの心の中にあるものを見通し、それをす
くって演説にするんです。だから、受けま
すね。しかし必ずそれは変節することになり
ます。私はそうなりたくない。だから空席が
あると元気が出るんです。空席のおかげで、
今、私としては、かなりちゃんとした話をし
ているつもりなんです(笑い)。(拍手)

私は、まったくのマグレで、小田実とい
う人物を電話でベ平連に引き出したんですが、
この人は、千人いても千人いても、人びと
を乗せるような演説はせず、ポツポツともの
を言って、決して聴衆から押されたい人な
んです。そういう人だからといって引き出し
たんじゃないですよ。あれはまったくの偶然で
した。ベ平連というのは、マグレの連続でし
たね。まったく理由がなかったというわけ
でもないんですが、それは、六〇年の安保闘争
のときに出来た声なき声の会が勢いをなくし
ていたので、北ベトナム爆撃に反対という一
点での運動を始めようと思ったのですが、そ
の指導者は、六〇年安保闘争のとき指導的役
割をしなかった人物にしよう、と考えたので

すね。「若い日本の会」という運動があったの
ですが、その指導者は、石原慎太郎だったん
ですからね、江藤淳もいましたし、開高健も
羽仁進もそうでした。ところが、小田は日本
にはいたんですが、あの『何でも見てやろう』
のインドでくたびれて日本で寝てたんです。
だから、国会を取り巻くデモなんかにまっ
たく出ていない。それでまあ、この人に頼ん
みよう、と思いついた、というだけのことな
んですね。それで電話したら、何と翌日す
ぐに飛んでくるということになっちゃった。ま
ったくのマグレなんですよ。

吉川勇一が出てきたんだって偶然ですよ。
彼はベ平連の呼びかけ人じゃなかったし、最
初のデモにもいなかった。その夏、ホテルを
借りて徹夜討論集会をやったんですが、テレ
ビ映りをよくしようと、ベトナムの地図をぶ
ら下げようと考えた。そのとき、知り合いで、
そういうの描くのうまいやつがいる、と連れ
出されたのが彼だったんです。つまり、最初
は地図の描き屋としてだったんです。そのう
ち、廉潔の士で、帳面付けなどもキチンとや
れる人だということがわかり、事務局を頼み、
ベ平連の帳面付けは彼が全部やりました。

その後の話ですが、ソ連が崩壊して、ソ連
の秘密文書などがアメリカのフーパー研究所
などに移ったんです。そのなかに、最初の脱
走兵を横浜からソ連船に乗せて脱出させる交
渉に当たったのが、吉川だが、ソ連の駐日大
使館のKGBが、ベ平連に一〇万円を渡した、

という記録が出てきたというんです。吉川に
確かめました。そんな金、貰ってないと言
うんですね。彼が貰ってないと言ったから、
貰ってないんですよ。

最初の頃、ベ平連の金は、みんな、小田だ
の私だの、壮年・中年グループの自弁だった。
それが権力者にはわからない。どこから資
金が出るに違いないと思うんですね。その
証拠もありますよ。今もとってあるんですが、
CIAが出した論文で、書いたのは、マウン
トホリヨークというかなり有名な大学の教授
で、それによると、ベ平連は小田がフロント
に出ているが、実はその裏に鶴見という人物
がいて、これが満鉄総裁だった後藤新平の孫
だ——これは事実なんです——そして、満
鉄が解散するときの隠し金があって、それが
ベ平連に流れているんだ(笑い)、鶴見は実は
右翼とも関係があって、右翼の巨頭の杉山茂
丸——これは頭山満と義兄弟のような関係に
あった人物ですが——の息子の夢野久作の伝
記も書いてある——これも事実です、そうい
う細かいところだけは、変に事実とあったこ
とを書いてるんですが、全体の関係図はとん
でもないものなんです、こんな論文書いてC
IAから金を取れるんですね、面白いね、ま
ったく。この証拠を私は手離しませんよ。ア
メリカのやり方とはどういふものかを、実
明らかにしてくれる文書ですから……。

さて、実際のベ平連の資金に、そんなこと
はなかった。一番金を出したのは、個人とし

ての小田実でした。私は小田さんほどではなかったけど、やはりずいぶん金も出した。当時、同志社大学に勤めていたんですが、給料の六〇パーセントはベ平連に出しましたね。その頃、『現代漫画』というハードカバーの漫画の全集を出すことになり、私が編者になった。これが大ヒットで、第一回が一〇万冊を超え、最初12巻の予定が27巻を超えることにもなって、印税は大変なものになった。ちょうどその頃、ベ平連は『週刊アンボ』という週刊誌を出すことになったんですが、私は、原稿書きたくないもんだから、その印税をそっくりベ平連に回しちゃった。これもマダレでしたね。

ですが、肉体的疲労のほうもつきつかったです。九年は辛いですよ。疲れましたね。次に齢もとって、耄碌もしてきます。それで、ある暗号の取り決めをしました。それは、あいつ耄碌してきたな、と思ったら、「中華料理を食べに行かないか」と誘うということなのです。そう言われることは、「お前、耄碌してきたから、引退したほうがいいぞ」と勧告されたことにしよう、というわけです。しかし結局、その暗号は一度も使われぬうちに、ベトナム人民が勝利を獲得できたから、目出度し、目出度しなんです。なぜ、そんな暗号になったか。石本新という人がいて、戦争中はかなりきちんとした左翼で、ソ連のこともよく研究していたんですが、彼によると、ベリヤの処刑のとき、食事に行こうと誘い出し、

幹部揃って食卓についたとき、ベリヤの両脇にサツと公安職員が座り、そして連行して処刑です。ああいうやり方はまったく良くない、そうでないやり方はないものか、と考え出したのが、中華料理案でした。これは本当に食べるだけで、そこから連行なんてしないんですよ。

◆「日米刑務所比較研究」の夢◆

私は、ポケットに「耄碌帳」というものを持っていて、耄碌の中で思いついたことを書き留めるんです。もう四冊目になりましたから、耄碌の充足状態ですね。

私には、今、夢が一つあります。アメリカ留学時代の最後、私の屋根裏部屋の住まいにFBIがピストルを持って三人もやってきて、留置場に入れたんですね。一九歳のときで、相当怖かったです。面白いこともありましたが。アメリカの監獄四箇所を知ることになりましたが、貴重な体験で、ハーバードと刑務

所と、その両方を知っているということは、私のアメリカ通としての強みですよ。ほかにはないですからね。刑務所で面白かったこと、まず飯がいい。イタリア人のコックでね、スパゲッティなんてうまかった。

私の耄碌の中の夢の話ですが、日本は今後、さらにさらに悪くなつてゆくだろうという予測があります。やがて、いよいよこの時、という時もあるだろう、その際、さつき話をした吉川勇一が私にサインをくれる約束になっているんです。「今ですよ」と。そして、そこで、決定的な座り込み抗議を行なつて、捕まつて、刑務所に入る。こうして、その時初めて、私は日米刑務所の比較研究（笑い）という新しい学問的テーマに出会うんです（笑い、拍手）。それが私の夢なんです。その夢を持って、私は耄碌しても、今日を生きているのです。終わります（拍手）。

（つるみ・しゅんすけ、哲学者、「九条の会」呼びかけ人）

「不戦の六〇年」を延ばしていこう

—滅びの歌はうたえない—

澤地 久枝

◆鶴見さんと小田さんのこと◆

こんにちは。四月一日に「九条の会・杉並」主催の講演会があり、定員五六〇人のところに八百何人も入り、満席で立ち見が出るほど。

鶴見さんは、『もうろくの春』（編集グループ「SURF」、03年）という詩集を出していらっし

やいます。あんなにユニークで素晴らしい詩集の著者が「もうろく」であるならば、「もうろく」ってなんていいんでしょね。先ほど鶴見さんは、信頼する人の話をなさいました。私が自分の人生で大切に思っている何人かの人——男の人の方が多いのはいささか残念ですけれども——鶴見さんはそのおひとりです。人生で出会った非常に大事な、尊敬している方なのです。

鶴見俊輔さんや大江健三郎さんを「新左翼」という枠の中にくくって、まったく認めない人たちがいる。さらに進めれば、アカになりますね。それならアカでもいいのよ、というのが私の立場です。少しひねくれているのかも知れませんが、国家とか権力とか強いものが嫌いなんです。



ついでに言うと、東大卒業と聞いたとたんに「警戒警報」が鳴ったかのようによに身体が反応するので。今度の「九条の会」の呼びかけ人の半分近くが東大卒業なんです。これはね、困ったことなのか、喜ぶべきことなのか

……。梅原猛さんは、京都帝国大学なのでしよう。帝国大学というのは本質的には似ているような気がするんです。個人的なおつきあいの中で、この人いやだなと思っていた人の出身校が東大だと聞くと、ああそうかと納得するようなのがあるんですね。

でも、小田美さんが東大出ということは、矛盾というか(笑)。彼は在日の朝鮮女性と結婚をしていて、夫人を「わが人生の同行者」と言います。彼がはじめて使い始めた言葉じゃないでしょうか。そしてとても素敵な娘さんがおられるんです。父親になる、それも娘さんを持たれたということ、東大を卒業したことで、ほんのわずかにせよ身につけておられたかも知れないし、がらみみたいなものを吹っ切るのにも、小田さんの人生にとっても、本当によかった。小田さんのために喜びたいし、私たちのためにもいいことだったなと思います。

ついでに脱線すれば、鶴見さんには太郎さんという素敵な息子さんがおられます。鶴見さんが結婚なさって父親であるということもよかったです。

◆「不戦の六〇年」◆

私は結婚はしましたが、離婚して子どもはいません。けれども、私の立場は、血のつながりも、国籍も問題ではない。いま、私は精一杯自分にできることをしようと思っっている

のですが、それは誰のためにかと言えば、未来の命のためなのです。それが私の生きる力になっており、命にかけても大切にしなければならぬ課題なんです。そのために何にも卓絶して大切なことは、平和であると思うのです。

私と同世代の作家、なだいなださんが、「戦後六〇年」と今しきりに言われているけれども、そうではなく、「不戦の六〇年」、戦わなかった六〇年と言うべきではないか、ということ短いエッセイの中に書いておられました。全く賛成です。日本歴史の中で、六〇年もの間、戦争によつて誰も死なず、誰をも殺さなかったということはないと思うのです。

この六〇年の歴史を、流れを変えさせずに延ばしていきたいし、日本だけでなく、世界中にそういう日が早く来るように、いささかなりとも力を尽くすのが日本人の役割だろうと思います。

なぜ日本人の役割なのかというと、日本という国は、第二次世界大戦で、悪名高いヒトラーやムッソリーニと盟約を結び、一つの運命共同体となって戦争をし、勝つ気だった歴史を持つからです。日本には、動物の世界で言うとハイエナみたいなところがある。ハイエナは命懸けでサバンナで生きていますけれども、日本はもうちょっとずるいなとも思う。

◆松岡洋右と日ソ不可侵条約◆

一九四一(昭和二六)年に松岡洋右という外

務大臣がソ連とドイツへ行くということがありました。それをお話しする前に、少し前後の時代のことを振り返って見ましょうか。

私以上によくわかっている方がおいででしょうが、若い人といっしょに、おさらいさせてください。

「昭和」の日本の戦争を、満州事変から敗戦までの「一五年戦争」として、ひとつながりでとらえたのは鶴見俊輔さんです。この一五年戦争の間にヨーロッパで第二次世界大戦が起き、日本が負けるより早く、ドイツは無条件降伏し、最後は日本一国がいれば世界を相手に戦争をつづけていたわけです。

発端は対中国の野心で、陰謀で戦争の発端を作為しながら、つまりこちらからしかけながら、日本はついに中国に勝てなかった。中国はポツダム宣言起案の戦勝当事国(米、英、中国)になった。昭和の戦争を考えると、キーンポイントは中国と思います。

始まりは、一九二八(昭和三年)六月の張作霖爆殺。ついで三一(昭和六年)九月一八日の柳条湖事件を口火の満州事変。どちらも日本軍の高級参謀たちが手を下しています。

一九三二(昭和七年)年に日本は今の中国東北部に満州国という植民地をつくった。これは明らかに侵略であり、傀儡政権を頭においた植民地でした。当時の国際連盟も国際条約違反とした。日本政府はこの決議が不満で、一九三三(昭和八年)年には、松岡全権がジュネーブの国際連盟総会で、脱退を宣言し、随員一

行をひきつれ、席を蹴って総退場するということがあります。

このときの、連盟決議に四二カ国が賛成した中で、一国だけ態度を保留した国があります。タイです。タイはそういうときには、イエスともノーとも意見を表明しない棄権の態度をとりました。王制を守り小さな国を存続させるための外交上の知恵として、そういう態度を取ったのですね。

日本は完全に孤立したわけです。ですが、世界を敵に回してひとりで戦争をするだけの軍事力も経済力もない。そこで、どこに近づいていったか。日本が国際連盟を脱退したのに続き、ドイツも脱退するのですが、この世界の孤児になったもの同士が、一九三六(昭和一二年)年に日独防共協定、つまり共産主義、具体的にはソビエト連邦に対する防壁をつくるための協定を結びます。一九三七(昭和二年)七月、「支那事変」開始。一九四〇(昭和一五年)年には、イタリアも加えて日独伊三国同盟になっていきます。当時、この三国を「枢軸国」といいました。

その翌四一年に、松岡外相は、当時のソ連首相、スターリンに会いにいったのです。すでにドイツは、一九三九(昭和一四年)年にソ連と独ソ不可侵条約を結んでいましたが、その直後にポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まっているわけです。ドイツがソ連に侵攻するのは一九四一(昭和一六年)年六月ですから、松岡外相がスターリンと会って、日ソ中

立条約を結んだのは、その二カ月ほど前ということになりました。

当時、近衛文麿を首相とする日本は、アメリカとの間の経済問題でデッドロックに直面していました。アメリカは、中国大陸で軍事侵略を進める日本に対し、経済制裁という対抗戦略をとっていました。日本は、戦争資源に乏しく、鉄も石油も全部外国に依存していたのですが、アメリカは、鉄鋼、屑鉄、そして石油と、戦略物資の対日輸出をやめます。

フランスも、アジアに植民地を持っていました。今のベトナムなどですが、当時はフランス領インドシナ、「仏印」といっていました。日本はそこに軍隊を進めます(北部仏印へは一九四〇年九月、南部仏印へは四一年七月)。それは、ドイツがヨーロッパ占領を進めた結果、宗主国がナチス・ドイツの支配下に入った植民地地域ができるわけで、仏印もまさにそうでした。日本はそこにある資源と権益を取ってしまおうという野心で出て行くんです。

松岡がソ連と中立条約を結ぶのが一九四一(昭和一六年)年四月で、その直後の六月二二日にドイツは、不可侵条約を結んでいたソビエトに攻め込んでいきます。最初は、すごい勢いでソ連領内に軍隊を進めていったのです。

そのとき松岡は、日本が直ちにソ連に宣戦布告をすべきだ、東部戦線でドイツの攻撃に対応しているソ連の背後からシベリア攻撃をすれば、ソ連はすぐに手を挙げるだろうと、閣議で強く主張しました。天皇にもそう進言

したのです。

ソ連と中立条約を結んできた松岡は、対ソ参戦を主張して「英雄は頭を転向する」などと言うんです。結局、この人の始末に困った近衛内閣は総辞職をして松岡を外務大臣からはずし、次の内閣をつくる。

日米交渉を続けながら、対米英(およびソ連)との戦争を決意する「時局処理要綱」が、十分の論議もなく決まります。日本の軍部はソ連侵攻を計画し、関東軍に大動員をかけ関東軍特別演習(関特演)という大動員計画を実施しました。しかし、シベリアが酷寒期になる冬が来る前に予定したような動員ができず、ソ連侵攻をやむなく断念したんです。

一九四五(昭和二〇)年八月八日、ソ連はヤルタ会談でのルーズベルトとの約束に基づいて、日本に宣戦します。それで、ソ連がいかに信頼のできない国だったのかということがしきりに言われます。しかし公平な目で見ると、約束を捨てて攻めていこうとしたのは、ソ連より先に日本だったということ、政治の野心の実態を見ておきたいと私は思っています。

◆昭和の時代の軍部の謀略◆

昭和という時代、とくに戦時下の昭和を考えると、不合理な、常識ではとても理解できないことが現実起きた。いつかそれが大きな流れになって、異議申立てなど不可能な社会になり、戦争一色ということになる。

明治憲法下であっても、国の政治に批判をした人たちはいます。文字通り命がけでした。殺された有名、無名の人たちがいる。でも「居留民保護」などを名目とする軍隊の行為をとめられなかった。

「過ぎし日露の戦いに、勇士の骨を埋めたる、忠霊塔を仰ぎ見よ」とうたった記憶があります。いまから百年前の日露戦争のマイナスの遺産が「満蒙生命線」論であり、中国の武力割譲だった。

さきほどの張作霖爆殺は、張作霖の部下たちが、その報復で日本側に戦を仕掛けてくるだろうから、それをきっかけに戦闘を拡大しようとする狙った策動でした。しかし、中国側は何も反応してこなかった。張作霖が即死したことも隠して、生死を曖昧にしておいたんです。

その年(一九二八年)の暮れに、張作霖の息子、張学良は、「青天白日滿地紅」という「青天白日旗」——蒋介石の国民党の旗ですけれども、その旗を奉天の自分の居城の上に高く掲げたのです。これは、日本側が満州、中国東北部を手に入れようとしていることに対するはつきりとした反抗の旗だったわけですよ。張学良という人は、一九三六(昭和一一)年には、西安で、最前線の激励にきた蒋介石を捕まえて兵諫(へいかん)、兵を挙げて諫言を呈するという(こと)をやって、国共合作を実現させるといふ役割を果たすことになりました。

ずっと晩年になって張学良は、日本の歴史

家から、何故あなたは一九二八(昭和三年)の暮れに、易旗(えきし)、旗を変えたこと)を行なって国民党政府と合流したり、あるいは三六年に西安事件を起こしたりしたのかと聞かれたときに、日本人は大事なひとつのことを見落としていた、私は中国人だ、と言ったんですよ。私は張学良という人は実におもしろい人物と思っています。

◆テロに見舞われたソ連の経験◆

いま、アメリカのブッシュ大統領がイラクで手こずっていますよね。テロリストと戦うというのは、どんなに困難でむなしなことか。終わりのない泥沼です。それは、過去、さまざまな戦争が物語っていることです。

日中戦争でも、日本は点と線だけを確保して面を支配することができませんでした。民衆全体を敵にしたからです。昼は日本軍に対してニコニコと素朴な貧しい農民の顔をしている人たちも、夜になれば忍んでくる共産軍に食べ物を提供しました。それがなければ、ゲリラ的な活動などできないんですね。

ソ連も一九七九年、アフガニスタンが独自の政治路線をとろうとしたときに、武力で制圧しようとして約一〇年間も軍事介入した。しかし、すごいテロに見舞われたのです。たとえば、道ばたで赤ちゃん置き去りにされて泣いている。戦車で進んできたソ連の兵士が降りていつて赤ちゃんをどけようとする、その瞬間に爆発したというんですね。食べ物や

花かごなどを置いたのではおとりにならない。親であるアフガニスタン人が、かけがえのないわが子を犠牲のおとりにまでして抵抗したというのです。それがソ連軍がアフガニスタン武力侵攻で経験したことでした。

こうしてソ連兵が殺されると、爆発によって遺体は、飛び散ってしまいます。軍は誰の遺体の破片か分からないけれども、かき集めて棺につめる。遺族と対面させるわけにいかないから、亜鉛の箱に入れて密閉して故郷へ帰す。親たちが墓参りに行くと、密閉した亜鉛の棺からウジ虫が出てきたというんです。

ソ連軍兵士は二四時間、いっどこから弾が飛んでくるか分からない。自分の目の前にいる人がいつ爆弾を投げるか分からないという異常な緊張を強いられるわけです。だから視野に入ってきて動くものがあつたら、瞬間的にそれを撃つてしまうということになる。そういう戦場から故郷の親元へ帰ることになったとしても、帰国直前の空港のトイレで首を括って死んだ将校がいるし、また母親の下に帰ってきているのに、親の見ている前でいきなり台所から包丁を持って通りへ出て、行きずりの人を刺し殺すというような事件も次々と起きた。

あの異常な自爆テロの戦線の中で、どんなに人間性が破壊されるかということを、聞き書きでまとめた人に、スベトラナー・アレクシエーヴィチというベラルーシの女性の作家がいます。私もその本『亜鉛の少年たち』一九九

〇年（邦題『アフガン帰還兵の証言』三浦みどり訳、日本経済新聞社一九九五年）を読んで、たくさんのお話を教えられましたけれども、いまイラクへ行っているアメリカの兵士たちは、まさにそういう状況の中にいるんだと、私は思ってみています。

今年はいベトナム戦争の終結三〇年ですが、ベトナムでアメリカ兵が直面した事態と、アフガニスタンのソ連兵、またイラクにおけるアメリカ軍の状況には、共通するものがありますね。

◆イラクでの米軍の戦死者◆

原田奈翁雄さんという筑摩書房で編集者だった人とそのパートナーが出している『ひとから』というユニークな雑誌があります。その最新号に、ニューヨークでのイラクからの帰還兵からの証言記録が載っています。それを見ると、イラクでは眠っていても神経は寝ていない。何か物音がしたり何か動いたりしたら、瞬間的にそっちを向いて撃つてしまうというんです。だから、味方を殺してしまうということも日常茶飯に起きうるし、ミサイルで攻撃を試みたら、結婚式をしていたとか、女と子どももしかいなかったということも、当たり前のこととして起きている、とあります。

イラクでいま行なわれていることは、どこで終わるのか分からないじゃありませんか。私は暴力というものを絶対に否定して生きて

いきたいという人間です。しかし、そういう人間でも、家族を皆殺しにされ、自分も死のうとまで思ったとき、ただ死ぬのではなくて、仇を取って死のうと、考えるかも知れない。普通の人が一瞬のうちにテロリストに変わってしまうわけです。そんな例がつづいて起きて、イラクでは当初の予想よりもはるかに大勢の死者が出ています。ブッシュ大統領は戦闘終結宣言をしたけれども、もし本当に終わったというなら、帰ればいいですね。だけど、帰らない。これね、終わりがありませんね。

アメリカは政治家が納税者に対して非常に神経を使う国です。アメリカの若者の死者が次々増えて行けば、ブッシュさんといえども将来はないですね。共和党そのものが駄目になるでしょう。

戦死した人たちのリストを見ると、圧倒的にアフリカン・アメリカンや、ヒスパニック——メキシコやその周辺の国々からアメリカに入国して市民権を取ったばかりの人たちが多いのです。食べていくための確実な就職口は、サラリーを国が払ってくれる仕事ですよ。日本でも、国家公務員や地方公務員への応募が非常な競争になっています。一番の例は沖縄で、沖縄では地方公務員になるのは、たいへんな出世なんです。大勢の青年が大学院へ行くので、そんなに勉強が好きなのかと聞いてみると、あるお母さんは、大学院を出して他の子よりも高学歴にすることで、その子を地方公務員、那覇市かどこかの役人にし

たいんだと言いました。

それによく似たような事情で、アメリカにきて、軍隊に志願し、ほとんど訓練されていない人たちが、イラクの最前線へ出されています。除隊後の大学進学などの恩典を願った結果です。その戦死率は非常に高い。その次に高いのは海兵隊です。海兵隊は高度な訓練を受けた人間しかなれないのですが、そういうベテラン戦闘員の海兵隊と、まだ訓練期間中のような、弱くて戦うことも知らないような非白人の人たちを最前線に出すことは、ベトナム戦争でも朝鮮戦争でも言われたことでしたが、イラクでも繰り返されているわけですね。

◆違憲の自衛隊◆

いまになって次々と資料が出てきているように、アメリカとイギリスがイラクへの戦争を始めた根拠はなにもなかった。たとえCIA情報が間違えたとしても、政府には当然チェック機構があるはずで、分かっている、アメリカは戦争をしたかったのだと私は思います。そういう戦争をやったアメリカに、日本人が意見を問われたことはありません。自衛隊派兵への賛否を聞かれたら、日本人の過半数は反対と言ったと思いますけれども。自衛隊は明らかに憲法違反です。警察予備隊だの保安隊だのと、いろいろ名を変えながら、どんどん大きくなってきた。私は、四〇年以上前に、海上自衛隊の観艦式に行ったこ

とがあります。そのときは、おもちゃみたいな八隻ほどのフリゲート艦を前に総理大臣が観艦式をやった。これでも海軍かと、私はあきれた。こんなにみすぼらしい軍隊いらない、なくしたい、と本当に思ったことがあります。「生兵法は大怪我の基」とむかしから言うでしょう。

そのとき海上自衛隊の人に、自衛隊に入った理由を聞いたら、満州でひどい目にあつたので、その仕返しのためにソ連と戦いたいという答えでした。そのソ連ももう崩壊してないんですよね。それなのに、なぜ日本の自衛隊はこんなにも大きくなってしまったのか。今では世界第何位かという強大な軍事力になっています。

◆憲法の精神の原点に戻る◆

私たちは、いま、重大な淵に立っていると思います。十一月の中旬にまると言っていた自民党の憲法草案が新聞に報じられているけれども、九条の第一項はいじらないというんですね。第二項もあいまい。つまり、いま政府や政府の後押しをしている人たちの考えていることは、条文はあのままにしておいて、今までのいろいろな誤魔化して自衛隊を強くしてきたように、既成事実を積み上げていけばいいんだと言うんでしょう。既成事実を積み上げていって、これでイラクで自衛隊員が一人二人殺されるような事態でも起きれば、そのときは問答無用で、もっと露骨に戦争を

する集団として姿を現わす。法律はあとからついて行くというような時代が来ると私は思っています。

そういうふうにごまかされ、ごまかされ、ここまでできてしまった六〇年というものを元に戻して、憲法の精神に、原点に戻っていきたい。原点に戻って、この国が、軍隊を持たない、国としての交戦権も永久に放棄した国として、世界の中で存在を示すことが国際貢献というものだと思います。

日本人はマイナスの歴史、過去を持っている。否定しようのない歴史を背負っている日本という国が、二一世紀に果たすことのできる役割とは、憲法を名目ではなくて、不変の誓約として実行に移し、殺し合いはいやだと思っている世界中の人たちにとつての智慧と力になることだ、その役割をぜひ果たしたいと思えます。

私は、自分の考えていることは怖がらずに言いたいと思います。同時に、それを悲痛にならず、ごく普通の言葉で言いたい。

戦争に負けたとき、私は一四歳ですから、本当の戦争体験があるとは言えません。でも、国が無責任にも一夜にしてかき消えた、そのあとの一年間の難民生活の経験は忘れようもありません。国というものの、権力というものが、無責任に消えてしまえば、誰も責任を取ろうとしないことへの思いが、私の人生の原点としてあります。私は、戦争のほんの端っここのことを覚えていてだけで、戦場経験などな

いのですが、でも、この世を去ってしまった先輩たちが、戦場で何を感じ、何を私たちに伝えようとしたのかということ、それを知らない人たちに、伝えていく責任とを果たしたいと思っています。

◆『レイテ戦記』の教えるもの◆

一九八八年に七九歳で亡くなった作家の大岡昇平さんは、三四歳という、兵士としてはかなり高齢で軍隊に取られました。妻があり、子どもが二人いるというサラリーマン、同時にフランス語の翻訳書があるフランス文学者としてでした。

フィリピンのミンドロ島でマラリアにかかり、高熱のため動けなくて、属する中隊から落伍して林の中で横になっていた。そのとき、歩兵銃は持っていただけでも、視野に入ってきた一〇代終わりぐらいの健康そうな米兵を撃たなかった、撃てなかった。そして捕虜になり、レイテ島の捕虜収容所に送られて敗戦を迎えます。大岡さんには大作の『レイテ戦記』があります。レイテ島というのは、日本軍の損耗率がなんと九七％、生きて帰った人が三％しかないというすごい戦場です。『レイテ戦記』はその克明な記録ですが、とても大部なので読めないという方は、大岡さんの『野火』でも『俘虜記』でもいいし、『ミンドロ島ふたたび』という作品もあるので、ぜひ読んで欲しいと思います。

『レイテ戦記』の中の文章をお伝えします。

「しかし、一度まわり始めた戦争の歯車は、その喚起したエネルギーを使い果たすまで回り続ける。ヨーロッパと太平洋には巨大な兵器と軍事物資が送られ続け、それはハワイ、オーストラリア、ニューギニアに蓄積されていた。戦争を続けなければ、アメリカ経済がひっくり返ってしまうのであった。日本が突然降伏してしまつたら、一番困るのはルーズベルトであつたらう。」

リモン峠というところは、最も戦死者が多い悲惨な戦場だったので、リモン峠の戦いについて、大岡さんはこう書いています。

「歴史から教訓を汲み取らねば、我々は永遠にリモン峠の段階に停まっていることになる。ただしこれは必ずしも、旧日本陸軍の体質の問題だけではなく、明治以来背伸びして近代的植民地争奪に仲間入りした日本全体の政治的経済的条件の結果であつた。レイテ沖海戦におけると同じく、ここでも日本の歴史全体が働いていた。リモン峠で戦つた第一師団の歩兵は、栗田艦隊の水兵と同じく、日本の歴史自身と戦つていたのである。死者の証言は多面的である。」

実際に起きた歴史的な事実のなかから何を受け取るか、証言から何を汲み取るかということが大事だと思います。

大岡さんの『ミンドロ島ふたたび』の中からも引きますね。

「もう誰も戦争なんかやる気はないだろうと、同じことをやらないだらうと思つていた

が、これは甘い考えだつた。戦後、二五年」——これは一九七〇年に大岡さんが書いた文章です——「戦後、二五年、俺たちを戦争に駆り出した奴と同じ握りの悪党どもは、まだ俺たちの上において、嘘やペテンで同じことを俺たちの子どもにやらせようとしている。」

レイテの捕虜収容所にいたときに、大岡さんは、ルーズベルトに対して一番の打撃を与えるのは、戦争をやめることだと考えた。軍需産業の頂点にいう性格がアメリカ大統領にはあるということを見越しての大岡さんの考えです。

いま、日本経団連の代表の奥田碩氏は、武器輸出三原則をやめようと言いはじめた。武器産業で金儲けをしたいと恥ずかしくもなく言うのです。武器は殺傷の道具なのに。

いま日本はイラクから撤兵もせず、さらに、同盟国であるアメリカの次なる戦争にただちに馳せ参じて参加をする国になろうとしている。一番大きな動機、理由は、正義でもなければ、民主主義でもない。経済原則、金儲けをしたいということと、ご主人様の機嫌を損ないたくないというだけです。いつからこの国はこんなにさましい国になつてしまつたのでしょうかね。

◆滅びの歌はうたえない◆

鶴見さんは、石垣りんさんを送る言葉の中で、「勇気を持って滅びてゆくこの国の光のひとつ」と書いていらっしやいます。私も、

心の底では滅びつつある国と想っているけれども、それを言ったら、本当に滅びちゃうと思うんです。こんな国、知らないよと言いたければ、いま人生の始まりのところに立つたばかりの若い人たちや、これから生まれてくる子どもの人生、未来を考えたら、やはり滅びの歌はうたえない。どんなに厳しい条件の下にあっても、私は理想——人類が共通して持っている夢に向かって、一足でも、半歩でもいいから近づいていく努力をしたい。その努力を放棄してしまったら、放棄してしまおう人が沢山出てきたら、この国は滅びるだろうと思います。でも、この社会を滅びさせてしまうには、あまりにも重たい過去の戦争で失われた多くの命があります。それから、そのあとに遺された多くの遺族の悲しみや苦しみというものも、私たちは背負わされていま生きています。日本人によって犠牲に供された他国の人たちを忘れられない。そういう犠牲を無駄にすることを、いま生きています。私たちは許されたいだろうと思います。

しかし、あまり突き詰めて、切なく考えないでください。私はイラク開戦の直前の夜中に考えたときに、そうだと思って、「ストツプ・ザ・ウォー」と紙に墨で書いたのね。そこにピースマークを朱色で書いて大きな涙が一つこぼれているのを加えたんです。それを家の玄関の扉にベタッと貼りました。残念なことだから二年以上経っているんです。でも誰もそれを剥いではいかないですね。ま

だちゃんとする。これを貼り続けてなければならぬというの、本当に悲しい。

今日の会合のポスターも扉に貼ってあります。うちには澤地としか表札は出ていないのですけれども、そばを通る人は、ここがあの澤地かと分かるだろうと思うんですね。

もう私は逃げも隠れもしない。バカだのアカだのと言われる世の中になってきているけれども、どうぞ、なんとでも呼んでくださいと言いつもり。若い人たちに、こんな国をどうぞと引き継ぐのかと思うと、残念でたまりません。残された時間でこの国を生まれ変わらせることはたぶん無理だと思えますけれども、より悪くすることに歯止めをかけるぐらいのことはできなくてはならないと思います。

◆胸を張って少しでも前へ◆

だから、一人ひとりの力がとても大事です。お互いにちよつとつらいのを我慢して、ちよつと勇気がいっても、そこは自分に言い聞かせて、胸を張って、少しでも前に出て行きましょう。自分だけでなくて周りの人ともつながりを持ち、温め合いながら、生きていることはいいいことなんだ、人生は素晴らしいものであるはずだという希望を捨てず、不戦六〇年をさらに長く延ばしていきたい。それが私たちの仕事です。これは義務であり、権利であり、きわめて人間的な営みです。そういう人の輪に、人の絆の中に友人だの知り合いだのいろんな人に入ってもらって、大きくして

いきたいと思えます。

さつき鶴見さんが、ベ平連のお金のことを言っておられました。私はもともと体が悪いときで寝てましたから、最底辺のベ平連のメンバーに終始したと思います。ベ平連の会費は一ヵ月百円でした。最近、過去の金銭出納帳をみていて、あ、百円だったんだと思いました。一年分として二〇〇円お金を送っているんですね。そのころの私は表に名前を出さないで仕事をしていました。無名のそうした人間でも、参加しないではいられない運動がベ平連の運動だったんです。最低の義務として月に百円の会費を納め、ベ平連のニュースにときどき投稿をしていた人間として、吉川さんの名前もよく知っています。

あきらめないで……。
絶望をするのは一瞬のうちにはできますけれども、希望を保つていくというのは、とてもエネルギーもいるし、努力しなくてはなりません。それぐらいの努力をする値打ちがあると私は思っています。まとまらない話になりましたがごめんなさい。ありがとうございました。

(拍手)

(さわち・ひさえ、作家、「九条の会」呼びかけ人)



国家は滅びようとも……

未来の世代に平和な世界を手渡したい

なだいなだ

◆別荘を脱走兵援助に貸して◆

私は澤地さんより一つ年上なんですけど、ペ平連の時代をなつかしく思い出します。当時、鶴見良行さんに頼まれて、軽井沢の別荘を脱走兵のために貸していたんですけれど、脱走兵の中にも、サポーターの中にも非常にのんきな人たちがいて、ある日管理人から電話がかかって来て、私の別荘に外人と日本人の怪しげなグループがいて、大声で歌を歌って騒いでいる、最近別荘荒らしとかいるから、警察に届けましょうか、と言うんです。慌てましたね。管理人に知人だから心配するなどと返事する一方で、鶴見さんにも、逃亡してるとそれを匿ってる者なんだから、あんまり人目に立つことをしないように、と注意したことがあります。その頃の思い出話は、あまり売れませんでした。『影の部分』（毎日新聞社、85年）という小説に書いてあります。私にとって非常に忘れられない時代です。

◆横浜事件再審と裁判官の問題◆

いま澤地さんは、日本の植民地にいたときに、八月一五日を迎え、一夜にして日本国家

は消えてしまった、と話されましたが、それは外地でのこと、実は日本の国家はしぶとくて、消えていなかったんですね。ついこの間、横浜事件の再審が決定されましたけれど、横浜事件というのを知っていた人、手を挙げてみて下さい。知らなかった人は？ 半数ぐらいですね。横浜事件の判決、特高に拷問されて、自白して、それをもとに有罪判決が下されたのですが、判決の下されたのは、いつかという戦後なんです。戦後だったということを知らなかった人、手を挙げて下さい。たくさんいますね。四五年の一〇月に、マッカーサーの司令部が特高と治安維持法を廃止せよと日本政府に要求するまでは、特高も生き続けていたし、そういう裁判も続いていたんです。しかもこの事件では、拷問によって、中央公論社の二人が死んだんですからね。そして一〇月に出された判決は、執行猶予つきではありましたが有罪、懲役二年だったんです。

一方、拷問をやった特高たちはどうなったかという、彼らも後になって訴えられ、一応有罪にはなったんですが、収監されること

は一度もなく生き延びたんです。こうしたことは、何と日本の百科事典にすべて書いてあるんですよ。しかもそれが分っていないながら、戦後の六〇年、ついこの間まで検察・警察は再審をずっと拒否し続けてきたんです。そういう事実を、私たちはぼんやりしていて、気がつかなかったのですよ。

憲法九条の問題にしても、今になって危うくなってきたわけではないのです。もっと以前に今の憲法を盛り立てて行く、あるいは私たちの方から積極的に憲法を改正する、という考えを持ってよかったんです。今の憲法の最大の問題は、裁判制度に関する条項にあります。最高裁判所の裁判官をやめさせたいと私たちが思ったら、どうすれば罷免できるのか。私たちは任命直後と、十年後の選挙のときバツ印をつけることぐらいしかできないのです。このままでいいのか、と私なんかは思うんです。しかし今のうちに九条を一生懸命守らなければならぬ時になって、憲法改正なんて言い出すとそちらの方に利用されてしまうから言い出せないでいるだけです。憲法というものを、もう一度読まなければいけない。

◆池澤夏樹の「新訳」日本国憲法◆

私は、正直に言いますが、憲法を通して読んだことはなかったんです。つい最近まで。前文や九条は何度も読みましたけど。なぜかという、読んでもなかなか頭に残るよう



◆ベトナム反戦運動に加わる動機◆

さて、私が運動に加わるようになった動機を話します。鶴見さんは、電話をかけたなら、私が簡単に引き受けたかのような話をされたけれども、私だって人間ですからね、理由もなく引き受けるわけではない。

その動機とは、私の戦争体験、空襲体験です。大阪に生まれ、育った私は十三歳でした。大阪に生まれ、育った私は十三歳でした。一〇日前後には、テレビではずいぶん東京大空襲の話が放映されましたね、でも大阪のはやらないんです。なかったみたいないない。だから東京中心主義という間違いが生じるんです。空襲は東京だけじゃないですよ。

三月一〇日の東京大空襲の日は名古屋、

その三日ほど後が大阪、そして神戸です。四つの大都市が大規模な爆撃を受けます。それがどんなに大きな規模だったかを示すものとしては、それから三カ月の間、大きな空襲がなくなりました。

なぜかというところ、サイパン、テニアンに集積していた焼夷弾を全部使い果たしてしまつて、六月になるまで大規模攻撃は再開されなかったほどののです。私は、一時期疎開をしていましたが、中学の試験を受けようと、大阪に戻った途端にこの大空襲に見舞われたのです。

どれほど大きなものだったかは、次のような話でわかるでしょう。この空襲があつて、焼け野原になつてしまつたため、その直後に予定されていた府立の中学、女学校の入試は不可能になり、日本の硬直した官僚政治としては稀なことですが、入試は中止、無試験で全員合格という措置がとられたのです。私も無試験で中学へ入ることになつたのです。そんな影響も及ぼすほどの大被害があつたのです。このあと、延々と大空襲が続きます。

◆カーチス・ルメイ将軍◆

三月までの空襲は、一万メートルもの高高度から軍事目標をめがけての爆弾投下で、命中率も低かった。そこへ、欧州戦線からカーチス・ルメイという将軍が転任してきて、日本空襲の指揮官になつた。この名前は是非覚えておいてください。ルメイは、作戦方式を全面的に変えた。千から千五百メートルぐらいの超低空から、大量の焼夷弾をばら撒き、竹と紙で出来ている日本の家屋を焼き尽くすという方式です。これは無差別爆撃です。

無差別爆撃というものを最初に実行したのは日本です。重慶爆撃などはそれです。サツ

カーの試合があつたとき、重慶で対日抗議の騒ぎが問題になりましたが、それはこうした記憶が消えていないからです。しかし、この重慶爆撃などをさらに大規模にしたのが、ルメイの焼夷弾攻撃です。「空の要塞」といわれたB29爆撃機が何十機、何百機とやつてきて、目標などもなしに、大量の焼夷弾をばらまくのです。大阪は、敗戦前日の八月一四日の大規模空襲まで八回も受けています。

ルメイは戦後、こういうことを書いています。もし国際戦犯裁判がアメリカに対してなされるならば、私は拘引され、人道に対する罪で戦犯にされるだろう、ただ、幸いにして戦争に勝つたから私はそうはならずすんだのだ、などと平然と書いています。

一方、爆撃したB29の搭乗員たちの手記も私はいろいろ読みましたが、それには、この任務はほんとうに辛い仕事だったと書いています。自分たちが爆撃し、殺しているのは、男は戦争に行っていないのだから、女、子供、老人たちばかりだ、それを殺す仕事はかなわん、でも戦争の任務だから仕方がない、というようなことを書いてますね。

原爆では、三〇万以上の死者が出ていますが、それを別にしても、ふつうの空襲でも三〇万以上の死者が出ています。これは一方的な破壊と殺戮でした。

◆黒煙の上と下との二重の体験◆

六月一五日にも大阪大空襲があるんですが、

そのときの状況を上空から撮影した写真を後に『ニューヨークタイムズ』の日曜版で見つけました。黒煙で覆われた大都市の写真です。私はその黒煙の中にいたのです。地獄でしたよ。真昼の空襲なのですが、黒煙で夜のような暗さになるのです。この写真の載った新聞は、ものすごく膨大な量のページ数でした。その一五〇ページに及ぶ新聞の大半は広告、女性向けのファッションだの、化粧品だの、あとは、プロ野球などのスポーツ、社交欄、結婚、株式、まったく平時の記事が満載されていきました。

戦後になって私を感じたことですが、私は、日中戦争の中で、これと似たような南京爆撃や重慶爆撃の写真を、私は日本の新聞で見て、平然としていたのだ、ということでした。やはり平時の新聞記事の並ぶ中に、印刷された重慶爆撃の写真——私自身がその煙の中に入るといふ体験をする前は、そういう写真を見ても無関心、ああそうか、というだけのものでした。ニュース映画で、上空から爆弾が落ちてゆき、下で煙が巻き上がる、そういう場面も平然と見ていたのです。でも、自分がその煙の中にいる体験をしたら、もう、そういう写真を平然と見ることは出来なくなりました。

一九六五年二月、ベトナムの北爆が始まりました。やはり爆弾が落ちてゆき、下で黒煙が舞い上がる、そういうニュース映画も見ました。私は二重の体験をしたのです。一つ

は黒煙の上からそれを平然と見た、もう一つは、黒煙の下の地獄にいた。ベトナム爆撃の写真は、私にとって、やったことであり、やられたことの再現でした。

◆「ベトナムを石器時代に戻してやる」◆

この北爆はルメイが命令して始めたものですが、その開始の少し前、六四年の秋に、日本政府は米空軍の総参謀長になっていたカーチス・ルメイを日本に招きました。なんと、勲一等旭日大綬章という最高の勲章を捧げるために招いたので。授けるのは天皇ですね。いったいこれは何ということですか！ 自ら戦犯になりかねなかったという日本人大虐殺の責任者に最高位の勲章ですよ。この授賞は航空自衛隊創設に際しての功績のためでした。この勲章を天皇から授けられたあと、ルメイは北爆を始めるのですが、それを開始するにあたって次のような言葉を言ったことがあります。私には忘れることの出来ない言葉です。彼は、「この空襲によって、北ベトナムを石器時代に戻してやるんだ」と公言したのです。これはやめさせなければならぬ、私はそう思いました。そこへ北爆に反対する運動を起こしたいが、という鶴見さんの電話があったのです。私が引き受けるにあたっての気持ちは、忘れないでください。

◆無意味な死の意味を考える◆

ところで、六月の空襲の次の八月一四日の

大空襲は、私にとって別の意味を与えました。敗戦公表の直前ですよ。今の大阪城公園の場所には、東洋一といわれた大きな兵器工廠がほとんど無傷でありました。ここに対しては、焼夷弾ではなく、一トン爆弾が投下されました。私の家は、その近くであり、家から二〇メートルほどのところにもそれは落ちました。恐怖の何時間かを手掘りの粗末な防空壕の中で過ごし、そこから出てきたとき、空襲直後の黒い雨で泥まみれになった一枚のピラを拾いました。そこには、日本語で「お国の政府は降伏しました。戦争は終わりました」と書いてあるんだ。私はびっくりしました。

一トン爆弾と一緒にそのピラは投下されたものだったのです。私はそのときは信じられなかったけれど、翌日、

天皇の放送があり、敗戦を知らされます。これほどむごい話はないでしょう。戦争はすでに終わって、お国の政府は降伏しました」という



ピラを撒きながら、一トン爆弾を投下する。それで殺された人は、いったい何のために死んだのですか。これほど無意味な死はないでしょう。私はそこから、無意味な死というものの意味を考え始めることになったのです。私はそれで二つの国の国家権力がやったことを調べました。

◆天皇の降伏決断発言の大嘘◆

一つは天皇の問題に絡みます。八月六日と九日に原爆が投下され、八日にはソ連が「満州」に攻め込んできます。敗戦は必至です。こうなつて初めて日本政府はポツダム宣言受諾を考え出します。そして中立国スイスなどを通じて、ポツダム宣言受諾の用意あり、という趣旨を連合国に伝えようとします。ただ、そのとき一つ条件をつけます。これは記憶すべきことです。「国体の護持」です。これに対し、連合国側は何も答えなかった。つまり国体が護持されるかどうかはわからなかった。皆さん方が習っている歴史の教科書では、そう書いたあと、大部分が、八月一四日に御前会議が開かれ、天皇は、「わが身はどうなるかわからないが、国民の苦難は見るに忍び難い、それで朕は降伏を決意した」と言ったと書いてあるでしょう。しかし、これは真つ赤な嘘です。その真つ赤な嘘が延々と六〇年間続いているのですよ。

事実はどうだったのか。私は当時の『ニューヨークタイムズ』などを全部調べました。

八月一日号には、日本が降伏を申し出てきたという大見出しの記事のすぐ次に、天皇はそのままおいておくであろうという見出しが続いています。翌二日になると、連合国側は天皇を存続させることに決めた、と書いてあるんです。そして、すべてはマツカースー総司令官の意向によるとも書いてあります。これらは当然、スイスなどを通じて日本には伝えられています。ですから、「わが身はどうなるかわからないが」どころではない。わが身は安泰だということは知っていたのです。それまで天皇は自分の身のことが心配だった。この戦争の元凶として、裕仁はヒトラー、ムッソリーニと並んで常に敵として名を挙げられて吊るされ、ヒトラーは自殺していた。すでにヨーロッパでは戦犯裁判も始まっていた。自分も裁かれるのではないか、彼は当然そう心配し、近衛文磨などに相談もしています。国体の護持などと表現されていますが、要は、天皇とその家族の命が助かるのかどうかということにすぎません。それがまず安全だと言うことは一二日にはわかったのです。

◆降伏を承知の上での大空襲◆

ところが、日本側からは「受諾の用意あり」というのが来ただけで、そのあと受諾の通告が一向に來ない。受諾の用意ありと通知したあと、二日ほどアメリカは空襲をしなかったが、その後の進展がないのでアメリカとして

は圧力をかけることにした。最大規模の空襲の再開です。八月一四日、B 29爆撃機八〇〇機を動員して攻撃したのが、わが大坂と、もう一つ徳山だったのです。膨大な死者が出ました。何のための死か。要するに天皇が国体の護持を振りまわして、なかなか正式の受諾を通告せず、また、アメリカ側は、日本の降伏を知らながら、大規模な殺戮攻撃をあえてしたのです。この体験をずっと考えながら、私は今まで生きてきた。

ルメイはその後もこうした作戦を続けます。北爆を知ったとき、私が考えたのは以上述べたようなことです。

◆イラクの黒煙の中への思い◆

ベトナムでもこの話をしました。さすが、年配の人は、ルメイを知っていましたね。自分たちもやられたのですから。

アメリカは、ベトナムにとどまらず、その後もずっとそうした殺戮戦術を継続してきているでしょう。アフガニスタンでもイラクでもそうでしょう。私はイラク攻撃の写真を目にすると、その黒煙の中でどういふことが起こっているか、私には理解できるし、そこに思いを馳せます。そうした思いを常に抱きつつ、私は市民としての行動を続けるのです。終わります。(拍手)

(おだ・まこと、作家、「市民の意見30・関西」代表、元「ベ平連」代表、「九条の会」呼びかけ人)